干潮の砂洲

——統一展望台にて——

結城　文

満面を日に曝して　国家が横たわっていた
てらてらと照る干潮の砂洲
北のイムジン川と南のハン川が出会い
西の海に入るところ
十一月朔日晴れ
ガラス張りの統一展望台の前にひろがる明るい空間
飛ぶ鳥の姿もなく
どちらの方向に流れているのかわからない
銅鏡色の水

今は干潮——
ところどころに現れた川床は
濡れた光を鈍く返し
徒歩渡ろうとすればできそうな距離
対岸の
同じ規格の白く四角い家々は
警備の兵士らの集落
望遠鏡をくまなく動かしても
人っ子一人見えない
何を焼いているのか
川べりに白い煙がゆるく立ち昇り
低く流れて
わずかに人の在り処をしめす

両岸には歩哨のブース
身を隠す木蔭も草蔭もない空間に
サーチライトのように
交差するひそかな監視の視線
北への望郷が
南との分裂の恨（ハン）が
ぎっしり
見えぬ人魂となり浮遊しうごめく

この上もなく平和に
この上もない緊張の
空っぽの空間
てらてらと照る干潮の砂洲に
満面を日に曝して　国家が横たわる